

交差点の「カッコー」、なぜポール型に

カッコー、カッコー……。渡ろうとした横断歩道の途中で、思わず立ち止まった。青になったことを知らせる電子音が聞こえてくる位置がおいしい。上から聞こえるものと思っていたが、大阪では下から普通なのか。振り返ると、信号機の横の地面に黄色いポールが生えていた。おまへはいったい何者なんだ。

音源の正体は腰の高さほどの太い棒に付いた丸いスピーカーだった。JR大阪駅前を歩く人を次々につかまえて尋ねる。「あのポールを知っていますか」。30代の女性は「っかりと見るのは初めて」。70代の男性は「視覚障害者のためとは知らなかった」。大阪の風景に溶け込み過ぎたのか、機能を正確に知る人は少ない。

大阪府警では「音響式ポール」と呼んでいる。信号が青になると音で知らせ、ポールの頂点について点字で現在地と進行方向が分かる。通常なら信号機の横についているスピーカーが大阪ではポール型になった。府内の約1200か所の交差点に約4600本設置されている。

大阪に振動式の名残

府警で勤務していた中西美紀男さんに話を聞いた。音響式ができる前の1970年ごろ、まず振動するポールが設置されたという。「岡山のメーカーが開発した振動式ポールが大阪のポールの原型になった」と説明する。

音響式ポールを製造する縁原電機(大阪市)の兼崎駿美さんは「岡山は点字ブロックの発祥の地なので、関係があるかもしれない」とヒントをくれた。

岡山市で点字ブロックを開発した三宅精一さんという人物が67年ごろに振動触知式信号機というポールを製作した。手や白杖で触れ、振動で青信号になったことを確かめられる。「安全交通試験研究センター」(岡山市)の由利公弘さんは「記録によると振動触知式信号機は74年までに全国に設置され、大阪府には253本あった」という。

振動式は青信号は分かるが、進む方向が分かりづらい欠点があった。由利さんによると、70年代ごろから全国でスピーカーから電子音によって青信号を知らせるものが普



LED表示など独自進化

及し始めた。振動触知式信号機から音響式の信号機に切り替わるタイミングで、大阪府警ではポール型の形を引き継いで音響式ポールを導入したということだ。

これまでに音響式ポールは大阪で独自の進化を遂げた。兼崎さんによると、LEDの小さな表示板が付いたモデルがあるという。音だけではなく表示板に表示される色と形で信号の色を伝える。大阪府内では9か所の交差点に32本設置されている。

LED付きの音響式ポールは岩手や福岡、愛知、和歌山各県でも導入されている。岩手県では県立中央病院前の信号機の横に2018年に設置。岩手県警によると視覚障害者や高齢者の歩行者が多い交差点の安全確保のため導入したという。

大阪府高槻市に住む津田一さんは緑内障と白内障が進行し、視覚に障害を持つ。それまではポールの存在をぼんやり意識していただけだったが、今では音響式ポールのある道を選んで歩く。「今後もあるでしょう」と語る。

50年近く大阪の交差点を見守りながらも、存在を意識されていない音響式ポール。その起源を探ると、視覚障害者の安全を確保する知恵の歴史が隠れていた。まじまじと眺めると、道を示し続ける役割を誇っているようにも見え

音響式ポールの歴史をひもとく

振動触知式信号機



1975年ごろ

音響式ポール



2012年

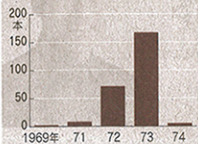


(出所)(一財)安全交通試験研究センター



現在地と進行方向が分かる

振動触知式信号機 大阪での設置数



津田さんは職業訓練校に通うため毎日利用する